古代・中世の挿絵芸術
—その起源と展開—

クルト・ワイッツマン 著
（プリンストン大学名誉教授）
辻　成史　訳
（大阪大学名誉教授）

ギリシャ語冊子本〈バシレイオスⅡ世の典礼月暦書〉

■A4判　上製函入　本文288頁　口絵205点

■定価　22,500円（本体21,000円＋税）

ISBN978-4-8055-0552-6　C3071

ビザンティン美術史、とくに写本研究の碩学であるクルト・ワイッツマンの大著を初めて紹介する。原著そのままの多数の図版を掲載した本書は古典学、聖書学、テキスト批評、美学といった隣接諸分野に大きな刺激を与え続け、古代・中世の挿絵芸術の発展史的経緯を追い、描写における古代・中世人の心理学的・精神構造的軌跡を克明にあとずけた、古典であるヴィックホフの『ウィーン創世記』にも比肩する、わが国の絵巻研究に対して多大な方法論的影響を与える名著である。

訳者のことば

本書（原著 Kurt Weitzmann, Illustrations in Roll and Codex, A Study of the Origin and Method of Text Illustration (Studies in Manuscript Illustration, 2)初版 Princeton University Press, Princeton, N. J., 1947)の目的は、西洋の古代から古代末期、ビザンティン時代、さらには西洋初期中世（プレ＝ロマネスク）に至る非常に多くの挿絵入り写本群、および関連する美術作品の関係を解明することにあり、その結果本書は、これら特定の時代と地域に固有の精神構造がどのようなものであったかを強力に示唆している。だがその反面、他の時代や文化圏の美術に直接に言及しているわけではない。にもかかわらず、訳者としてこの書の日本語訳をあえて上梓することに意義を見出したのは、著者クルト・ワイッツマンがこの書を通じて明らかにしたことの多くが、西洋の写本挿絵のみならず、他の文化圏に属する様々な挿絵芸術、さらには物語芸術の研究に多くの示唆を与えてくれるからである。したがって、訳者がこの書を手に取って頂きたいと願っている読者は、西洋美術専攻の方はもちろんではあるが、むしろ日本・東洋の古代や中世の挿絵・物語芸術に研究に携わる人々である。西洋古代・中世美術研究に関するワイッツマンの膨大な貢献については、ワイッツマンの高弟ハーバート・L・ケッスラーが巻末に詳説している。

中央公論美術出版
http://www.chukobi.co.jp
〒104-0031　東京都中央区京橋2-8-7
電話　03-3561-5993　FAX　03-3561-5834

お取り扱いは

クルト・ワイッツマン

［著者略歴］

■ Kurt Weitzmann（クルト・ワイッツマン）

1906年、カッセル近郊で生まれる。ミュンスター、ヴュルッブルク、ヴィーンで美術史を学び、最後はベルリン大学において A. ゴルトシュミットの指導の下でビザンティン象牙彫刻について博士論文を提出。引き続きゴルトシュミットとともにビザンティン象牙彫刻の二部からなるコーパスを出版した。1935年、プリンストン大学に招聘されたのを契機にナチ統治下のベルリンを離れ米国に移住。1993年に亡くなるまで終生プリンストン大学に留まった。この間在プリンストンの高等学術研究所所員、ハーヴァード大学委託ダンバートン・オークス・ビザンティン研究所教授を兼ねる。1983年にはベルリン大学から、1993年にはプリンストン大学から名誉学位を授与される。

［訳者略歴］

■ 辻　成史（つじ・しげぶみ）

1933年東京に生まれる。東京藝術大学美術学部芸術学科卒業、立教大学文学部大学院組織神学専攻課程およびプリンストン大学大学院美術考古学科博士課程修了・Ph. D. ダンバートン・オークス・ビザンティン研究所、プリンストン高等学術研究所、テキサス大学、ハイデルベルク大学等で研究員を務める。大阪大学文学部美学科教授・名誉教授、金沢美術工芸大学大学院芸術学専攻特任教授等を歴任。
主著に『イデアの宿り— 古典古代からビザンティン美術へ —』（新潮社、1976年）。『トルコ共和国ムーラ県フェテイイェ市エリュデニズ近傍のビザンティン遺跡調査 — 第1回途中経過報告 —』（英文、1995年）ほか論文等多数。

目　次

日本語版序文　クルト・ワイッツマン
はじめに　辻　成史

序 ——古典古代書物装飾研究の歴史——

第1章　文学と再現的諸芸術の一般的関係
A. 文学的内容の視覚化に関する三手法
1. 同時的手法
2. 単独場面による手法
3. サイクルによる手法
B. ヴィクホッフの用語に対する批判
C. サイクルによる手法のもっとも優れた表現手段としての写本

第2章　ミニアチュールと本文の間の物理的関係
A. 古典期の巻子本における挿絵システム
1. 現存するギリシャ語巻子本断片
2. ギリシャとエジプトの巻子本挿絵の関係
3. 冊子本における巻子本挿絵システムの存続
4. 古典期の巻子本の再構築
B. 冊子本になってからの変化の諸段階
1. 文柱幅の拡大とミニアチュール
2. 本文からのミニアチュールの解放
3. 画枠と背景の付加
4. 全頁大挿絵
C. 頁周縁の欄外挿絵および注解挿絵
D. 巻子本における連続帯の問題

第3章　内容に関連してのミニアチュールと本文の関係
A. ミニアチュールと様々な種類の本文の結び付き
1. 基本となった本文と結び付いたミニアチュール
2. 新たに［異なった］本文の系譜に取り込まれたミニアチュール
3. 異種の本文中に移植されたミニアチュール
4. 本文に根拠を持たないミニアチュール
B. 依拠する本文に対するミニアチュールの様々な関係
1. 原型の創作段階における芸術的約束事あるいは方便の使用
2. 転写の作業過程における時代の流行的要素の影響
3. 誤解
4. 装飾的埋め草
5. 本文の要請に基づかない補完的人物像
6. 本文からの意識的な逸脱
7. 構図上の図式の改変

第4章　本文批評と画像批評の関係

第5章　挿絵入り書物の基本的まとまりとしてのミニアチュール・サイクル
A. 単一サイクルからなる写本と複合サイクルからなる写本
B.「一個の図像学的単位としてのサイクル」という考え方が様式批判におよぼす影響

中世写本装飾史に対するクルト・ワイッツマンの寄与について　ハーバート・L・ケッスラー
訳者あとがき
索引